

わが国は現在世界有数の長寿国家であります。また、代表的な動脈硬化性疾患である、虚血性心疾患による死亡率が先進国のなかで唯一、増加傾向を示してないことが特徴的です。日本人の多くが健康で長生きをしている秘訣がどこにあるのか、海外の健康や栄養にかかわる研究者だけでなく、栄養行政に携わる人々や企業なども注目しています。しかし、わが国が世界に誇ることができる、国民の健康や栄養をモニタリングする仕組みのひとつである、国民栄養調査（現国民健康・栄養調査）の調査報告書である「国民栄養の現状」を例にとっても、海外の人々がこれを読んで参考にすることは容易ではありません。このように、わが国が長年にわたって積み重ねてきた経験を、他の国々と積極的に共有することが十分なされていなかったと考えられます。

当研究所ではこれまで、WHO（世界保健機関）やFAO（国連食糧農業機構）などの国際機関からの情報提供要請、日本の栄養学研究に関する海外の研究者や企業からの問い合わせ、アジア地域における栄養施策の策定・実施に際しての専門知識の提供といった対応は、研究者が個別に対応する場合がほとんどでした。現在は国際栄養協力室が窓口となり、一元的に整理を行っ

ています。国際栄養協力室は、国際・産学共同研究センターに産学連携室と並んで設置されたまだ新しい室ですが、今後は国立健康・栄養研究所が他の国々の研究者らとさらに活発に交流し、共同研究を発展させる新しい窓口となる役割を担っています。

国際栄養協力室では、2004年1月16日に「生活習慣病予防を視野に入れた母子栄養について」と題した、アジアネットワークシンポジウムを開催する予定です。現在、東南アジアの多くの国々では、低出生体重（出生時体重2.5kg未満）で生まれる子どもたちの割合が20～50%と非常に高い割合を示しています。こうした子どもたちでは、成人後に虚血性心疾患や糖尿病、高血圧といった慢性疾患に罹患しやすいことが指摘されており、胎児期あるいは乳幼児期からの予防が重要であることが言われています。将来を担う子どもたちの健康を増進するためには、将来の疾病リスクを踏まえた対策が必要であるという考えから、アジアの国々の研究者らと知見を分かち合いたいと考えています。プログラムの詳細については、また後日お知らせさせていただきますので、ご関心のある方はぜひお越しください。

